

Title	社会生活の対象論的構造
Sub Title	
Author	新館, 正國(Niidate, Masakuni)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1934
Jtitle	哲学 No.12 (1934. 8) ,p.1- 46
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000012-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社會生活の對象論的構造

新 館 正 國

序 言

問題 人間の社會生活は、認識の對象として如何なる構造を具えてゐるか。

この問題は、その解決の眞の端緒を、遡つて人間生活そのものの對象論的構造の裡に見出すべきである。蓋し社會生活は人間生活の一樣相であり、後者を離れて前者は存在し能はぬからである。認識の對象の構造は、常に認識の對象の存在の裡に求められなくてはならない。社會生活の對象論的構造を専ら人間生活そのものの對象論的構造を背景として究明すること——これが本篇の問題である。

而して本篇に於て筆者は、この問題に、主としてその社會學對象論の根本問題

としての側面から検討を加へて行きたいと思ふのである。

問題の意義 右に擧げた問題の立て方、Problemstellungは論理的には極めて單純にして明白に思へる。

然るに社會學對象論研究の實踐に於ては、この單純にして明白な道が從來殆んど棄て、顧みられなかつた。即ち其處では社會生活の對象論的構造への追求が、全く社會生活そのものに對する諸學者の直接的洞察の裡に幽閉されてゐて、未だその存在根據たる人間生活の對象論的構造の検討へと意識的に解放されてゐない。(この事實は、獨り社會學のみに止らず、理論的社會科學には一般に共通な現象であらう。)しかし乍ら斯く云へばとて、從來の諸學者の見解にはすべて一顧の價値も無いといふのでは勿論ない。固より數多の俊秀な諸學者が、彼等の社會生活に對する直接的洞察の裡に猶ほ克く社會生活の真正な對象論的構造を極めて微妙な點に至るまで把握してゐることは否定し得べくもない。然しこの場合に於てさへ同時に、彼等の捉え得た社會生活の真正な對象論的構造が未だ部分的斷片的であつて全體の完結的でないこと、従つて彼等の見解は部分的には如何に尖銳

巧緻を誇り得やうとも、全體としては未だ存在遊離的な抽象の殘滓を止めてゐること亦見逃し得べくもない。社會學對象論の研究に於て現に我等を困惑せしめてゐる多岐錯雜を極めた諸見解の對立は、究極に於て一に夫々の見解に潛むこの抽象の殘滓に胚胎するのであり、この抽象の殘滓こそは、從來の諸學者が彼等の注意を徒らに社會生活の表面にのみ低迷せしめて、その奥底に横たはる人間生活へ意識的に沈潛せしめ得なかつた問題の立て方の不徹底性に因由するのである。されば從來の諸學者の見解に於ける生あるものと死せるものとを辨別して眞の社會學對象論を建設する爲には、我等は先づ問題の立て方に於て從來の直接社會生活そのものへ通する複雑難解な存在遊離的の道を捨て、社會生活の母胎なる人間生活へ迫り行く單純明白な存在觸接的の道を選ばなくてはならない。本篇の問題の重味を筆者は専らこの側面から測定するものである。

第一章 人間生活とその認識

體驗と認識 社會生活と認識との關係を存在の基底に於て決定するものは、人

間生活と認識との關係である。

然るに人間生活は、その存在の最も具體的な現實的な姿に於ては、體驗の對象であつて、認識の對象ではない。而してこの體驗の世界を認識の世界へ解體せしめる契機は、體驗の世界そのものに内在する存在の特質である。この關係は丁度一葉の風景畫が、その風景に對する畫家の視覺體驗そのものの模寫で在り得ず、常にその視覺體驗に内在する風景の特質の描寫で在ると同様である。人間生活に關する認識は人間生活の體驗に内在する存在の特質に關する認識である。

認識の諸相 然るに人間生活の體驗に内在する存在の特質は、宇宙とともに無盡藏であり、従つてその存在の特質に關する認識も亦無限に豊富で在り得る。

この無限に豊富な人間生活に關する認識の現實的な貯水池は、常識である。然るに常識に於ては本來統一的關聯に置かるべき人間生活の諸特質が、單に特殊性斷片性に於て把握されるに止り、従つて全體としては無限の雜多として現はれて居る。然るに我等の認識は永くこの無限の雜多の裡に停滯しない。それは、對象の統一的構造に促されて、無限に雜多なる常識の曠野を統一的に無限なる理論の

沃野に開拓せんとする。リツケルトの言葉を籍りて云へば、theoretische Chaosを theoretische Kosmos に統一せんとするのである。しかし理論が直ちに學問ではない。すべて理論に於ては、固より夫の常識に於て個々別々に把握された存在の諸特質が何等かの程度に統一化されてゐるとは云へ、その統一的傾向には自ら無意識的・無組織的と意識的・組織的との別が在る。前の傾向を帯びる理論は謂はゞ常識に於ける學問であり、後の傾向に従ふ理論は學問と化せる常識である。

斯くて人間生活に關する學問は、その存在の諸特質に關する意識的・組織的理論として、人間生活に關する究極妥當的な認識を構成する。蓋し人間生活の體驗に内在する存在の諸特質は、夫々獨特な性質を具え乍ら、存在の實相に於ては統一體を成し、従つてその統一的關聯に於てそれらは眞に存在の特質たる内實を獲得するものであるからである。換言すれば、存在の諸特質を意識的・組織的に統一化することは、存在の諸特質を眞に存在の實相に於て把握せんとする認識の最後の努力にはかならないからである。斯くて認識は常識から學問への道を辿つて、存在の表面からその根底へと降下し行くのである。

學問の體系 然らば人間生活に關する學問は如何なる體系を具えてゐるか。既に指摘したやうに人間生活の存在の特質は、先づ常識に無限の雜多として現れて來る。しかしこの無限の雜多を直ちにその儘一つの全體に統一することは、我等の有限な認識に在つては、最高の理論的認識にとつてさへ不可能である。體驗に内在する存在の特質を、不可知性を帯びる體驗の全體性を何等かの側面へ畸形化することなしに把握し得ないのは、我等の認識の永遠の宿命であると云はなくてはならない。此處に於て學問的認識は無限に雜多なる存在の特質に於ける統一的構造を、先づ存在の部分領域の裡に究明し、次いでその部分領域相互の關聯を存在の全體領域の裡に討究するに到る。前者が科學であり、後者が形而上學又は存在論である。

然るに存在の部分領域とは、存在の諸特質に於ける様相であり、これは認識技術的には、直接常識を通じて我等の經驗に入り來たる存在の諸特質を比較考量することによつて判明され得る。従つて斯くの如き存在の部分領域を個別的に對象とする科學は、我等の經驗には觸接するが、存在の實相に對しては猶ほ相當の距離

を剩す學問的認識である。蓋し存在の部分領域も亦、夫々獨特な性質を具え乍ら、存在の實相に於ては統一體を成し、それらは寧ろこの統一的關聯に於て眞に存在の部分領域たる内實を獲得すべき筈のものであるからである。科學の認識は、假令それ自身如何に完成の域に進まうとも、その本質上存在の實相に對しては永遠に「出來合ひ服」である。然るに存在の全體領域は、存在そのものが生動の過程に在る限り、到底我等の經驗に包攝し盡さるべきものではない。部分領域相互の關聯を此處に究明せんとする形而上學(又は存在論)が、認識技術的に超經驗的な飛躍を餘儀なくされるのは、決して學者の逃避的な恣意に據るのではなく、實に斯る存在の本質に據るのである。フアウストは、この世界を最も深いところで統一してゐるものを知りたいといつた。學問的認識が超經驗的飛躍をも敢へてして存在の實相へ肉迫しやうとするのは、全く人生に本有されるこのフアウスト的衝動の發露と見るべきであらう。斯くて形而上學(又は存在論)は、經驗と存在の實相とに對して夫々科學とは全く正反對の距離を執るのである。

右に述べたやうにこの人間生活に關する學問の二部門は、夫々独自の短所と長

所とを併せ有して居り、従つて孰れも斷じて一を以て他に代え得る性質のものではない。人間生活に關する學問の歴史に現れてゐる形而上學獨裁主義、科學萬能主義は、孰れも嚴にその再興を排撃せらるべきものであらう。

科學の體系 却說我等は、人間生活に關する諸科學が人間生活の存在の特質をその存在の様相について各個に組織化統一化するものであることを知つた。固よりこの場合その組織化統一化の基準となるものは、存在の統一的構造そのものである。

されば人間生活に關する諸科學の研究に於ては、先づ各自の研究領域たるべき存在の様相が確定されなくてはならない。この課題は先にも指摘したやうに、認識技術的には先づ直接常識を通じて我等の經驗に入り來たる存在の諸特質を各個に比較考量することに由つて解決せられてゐる。しかし乍ら斯くして設定せられた存在の諸様相は、飽く迄も各個に設定せられた存在の諸様相であり、従つてこれらを存在の特質全體の前に引き出だす時は、其處に重複若しくは脱漏なきを主張し得べき何等の確固たる根據が無い。然るに研究領域たる存在の様相が存

在の特質の上に重複する時は科學の破滅であり、設定せられた存在の様相から存在の特質が脱漏する時は科學の貧困である。蓋し本來存在の様相は、夫々特有の性質を具え乍ら、存在の特質全體の上では斷じて重複を許されず、常に統一的關聯を形成すべきものであり、存在の特質全體は斯かる統一的關聯に在る存在の様相にすべて吸收さるべきであるからである。現代の人間生活に關する科學的研究の忌はしき標識は、實に斯くの如き科學の破滅、科學の貧困に在るのである。

此處に於て人間生活が、認識の對象として、如何なる存在の様相から形成されてゐるか——この問題を我等の經驗に入り來たる存在の特質全般に互つて討究する人間生活に關する對象論が、科學の生存の爲にもその發展の爲にも要求されて來る。科學が存在の様相の下に於ける存在の特質の統一化であるとするれば、對象論は存在の特質の上に於ける存在の様相の統一化である。従つて科學は存在の特質の實質的研究であり、對象論は存在の特質の形式的研究であるとも云はれ得るであらう。而して諸科學は各個に設定せる存在の様相を研究する限り、相互的には單に冷淡なる並列の關係に立つに止まる。然るに諸科學の研究領域が存在

の特質全般に亙つて統一化される時は、それらは緊密に協力する體系の關係に入り込むのである。而してこの體系の關係に立つ時、諸科學は始めて各自の研究領域内に在る存在の諸特質を眞に存在の統一的構造に従つて組織化統一化し得るのである。蓋し對象論に於ける存在の様相の統一化は、正に存在の特質の上に描かれた存在の統一的構造にはかならないからである。

第二章 人間生活の構造

人間生活と人間 既に指摘したやうに、人間生活そのものは體驗の世界である。然らばこの世界の存在を現實に支持してゐるものは誰か。普通にはそれが生ける個人と考へられてゐる。しかしこの考へ方は、眼前の印象に捉はれ易い常識の過誤でなければ、十九世紀の原子論的な個人實在論の妄想であらう。蓋し嚴密に個人として生きることが、空想の孤島に棲むロビンソンにさへ不可能であるからである。現實の地上に生きる人間は常に我、*Ich* であると共に我々、*Wir* である。個人であると共に社會人である。ガイゲルの言葉を籍りて呼べば、それは生活體

といひての人間(Der Mensch als Lebewesen)と稱すべきものであらう。人間生活は、生活體としての人間に由つて現實的に支持せられてゐる。従つて人間生活の體驗に内在する存在の諸特質は、先づ生活體としての人間の實存形式 Wirklichkeitsform であるといはれねばならない。

人間の構造 然るに生活體としての人間は、その存在の様相に於て獨り我であると共に我々であるばかりではない。それは又精神 Seele であると共に身體 Leib である。正確に云へば人間は、その存在の量に於ける様相に従へば我々であると共に我々であり、その存在の質に於ける様相に従へば精神であると共に身體である。而して此處に存在の量と云ふのは、存在の質の Daseinsform であり、存在の質と云ふのは存在の量の Soseinsform である。従つて我々とは必ず精神と身體とに基いて一定の活動を爲し、精神と身體とは常に我々とは我々とは據つて一定の存在を執るのである。これを逆に云へば精神と身體なくして我々とは活動せず、我々とは我々なくして精神と身體とは實存しない。

然らば先づ我々とは、人間の存在の量として如何なる性質を有する様相で

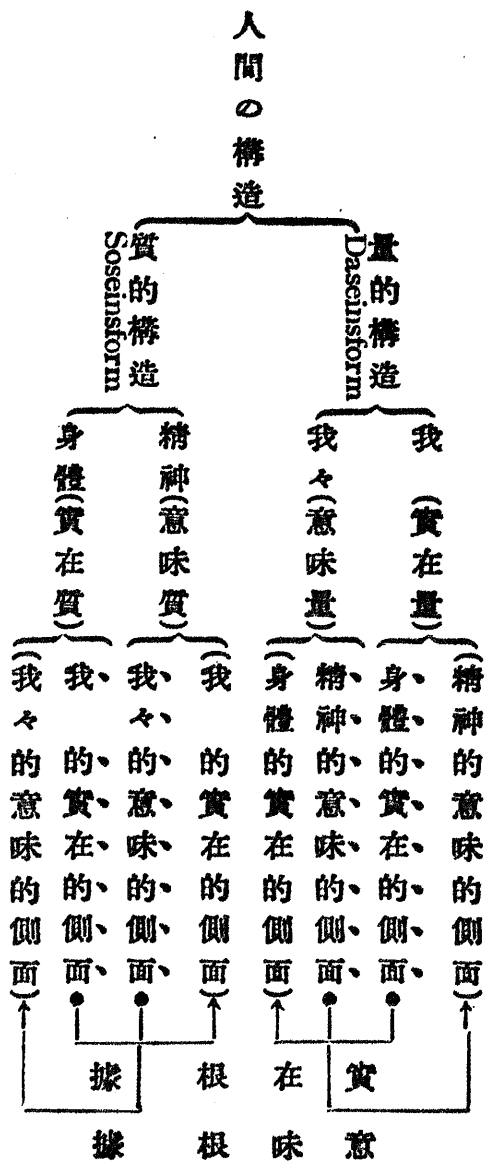
あるか。若しも兩者が同性質の量の大小であるとするれば、兩者に於ける存在の様相としての意義は失はれ去つて了ふであらう。蓋し前章にも述べたやうに存在の諸様相は本質上存在の諸特質の上に重複するを許されぬものであり、それらは存在の實相に於ては統一的關聯に置かれ乍らも、存在の様相としては夫々独自の性質を具えねばならないからである。此處に於て筆者は人間の存在の量に於て、實在量と意味量とを區別する。前者が我であり、後者が我等である。實在量としての我は、意味量としての我々の實在根據であり、意味量としての我々は實在量としての我の意味根據である。従つて我は我々の單位でもなければ、我々は我の總計でもない。人間を單に我と誤認することは、人間を直ちに我々と誤認することと共に一般に最も陥り易い錯覺であらう。人間なる存在は意味的實在的存在である。それは實在的には我として存在し、意味的には我々として存在する。而して我は我々に由つて意味づけられ、我々は我に由つて實在づけられて、人間なる意味的實在的統一體を現實に形成するのである。

この存在の量に於ける二様相に見出されたのと同様な性質が、次いで存在の質

に於ける二様相の上にも亦観取せられる。精神なき身體又は身體なき精神は共に生ける人間の現實には存在しない。前者は屍であり、後者は幽霊であらう。而して精神と身體とは、それらが存在の質に於ける様相であつてみれば、もはや如何なる意味に於ても同性質であることは許されない。人間の存在の質に於て、精神はその意味的側面であり、身體はその實在的側面である。これらを、存在の意味量、實在量なる用語例に倣らつて存在の意味質、實在質と名付けてもいい。意味質としての精神は、實在質としての身體の意味根據であり、實在質としての身體は、意味質としての精神の實在根據である。

斯くて人間の構造をその存在の様相に従つて分析すれば、それは先づ量的構造と質的構造とに分かたれる。而して量的構造は一面に於て實在量としての我を、他面に於ては意味量としての我々を肢體とし、夫々に精神的意味的側面と身體的實在的側面とが固着する。同様に質的構造は意味質としての精神と實在質としての身體とを肢體とし、夫々に又我的實在的側面と我々の意味的側面とが固着するのである。而して實在量としての我に於てはその身體的實在的側面が固有の

存在の側面であり、この側面に於て我は我々の身體的實在的側面の實在根據を成すのである。逆に意味量としての我々、に於てはその精神の意味的側面が固有の存在の側面であり、この側面に於て我々は我の精神の意味的側面の意味根據を成すのである。同様の關聯が、精神と身體とに於ける各側面の間にも見出されるであらう。即ち精神に固有の存在の側面は、その我々の意味的側面に在り、身體に固有の存在の側面はその我的實在的側面に在る。而して前者は身體の我々の意味的側面の意味根據であり、後者は精神の我的實在的側面の實在根據である。今この構造關聯を一括して表示すれば、次のやうになる。



人間生活の構造 右に展開せられた人間の構造は、直ちにその實存形式なる人間生活の存在の様相に反映する。

人間生活の體驗に内在する存在の諸特質は、先づ量的には、即ち存在の *Dasein* form に於ては我に由つて支持せられる個人生活と我々に由つて支持せられる社會生活とに吸収せられ、質的には、即ち存在の *Soseinsform* に於ては精神に由つて支持せられる文化生活と身體に由つて支持せられる現實生活とに吸収せられる。

然るに既に指摘して置いたやうに、存在の *Daseinsform* が存在の實相に於て存在の質の *Daseinsform* であり、存在の *Soseinsform* が存在の量の *Soseinsform* であるとするれば、個人生活と社會生活には夫々文化的側面と現實的側面とが内在し、文化生活と現實生活には夫々個人側面と社會的側面とが内在することは論を俟たない。而して個人生活が人間生活の存在に於ける實在量であり、社會生活がその意味量であること、同様に文化生活が人間生活の存在に於ける意味質であり、現實生活がその實在質であることも亦、夫々の支持者の性質に據つて當然であらう。従つて個人生活の固有の存在の側面は、その現實的實在的側面に在り、社會の其れは、その文化

的意味的側面に在る。同様に文化生活の社會意味的側面は、その存在の固有の側面であり、現實生活の個人的實在的側面は、その存在の固有の側面であらう。而してこれらすべての人間生活の存在の諸様相は、實在的並に意味的の根據の關聯 *Fundierungszusammenhang* に由つて統一的關聯に置かれるのである。即ち個人生活は社會生活の實在根據であり、社會生活は個人生活の意味根據であり、同様に文化生活は現實生活の意味根據であり、現實生活は文化生活の實在根據である。而してこれを更に夫々の存在の側面に就て見れば、個人生活の現實的實在的側面は社會生活の現實的實在的側面の實在根據であり、社會生活の文化的意味的側面は個人生活の文化的意味的側面の意味根據であり、同様に文化生活の社會的意味的側面は現實生活の社會的意味的側面の意味根據であり、現實生活の個人的實在的側面は文化生活の個人的實在的側面の實在根據である。

斯くて人間生活の存在の諸様相は、何等重複することなく統一的關聯に置かれて存在の實相を反映し、其處に存在の諸特質は、すべて脱漏なく包攝せられて始めて眞に存在の特質たる内實を獲得するのである。従つて人間生活に關する認識

は、それが人間生活の體驗に内在する存在の諸特質に關する認識としてそれらの諸特質を眞に人間生活の存在の特質たる内實に於て把握する爲には、先づ上述の如き人間生活の構造關聯を前提とせねばならないのである。この人間生活の構造關聯を無視する時、人間生活に關する諸科學は破滅か貧困か孰れにしても救ひ難き混亂の巷へ投げ出されるであらう。

個人生活と社會生活 然るに從來個人生活と社會生活とは、夫々の性質に於て、
も、兩者の關聯に於ても、著しく歪曲せられてゐた。

固より從來と雖も、この兩者が孰れも人間生活の存在の量即ち *Daseinsform* であることは認められてゐた。しかし兩者がその存在の量に於ける二様相であることは未だ確然とは認められてゐない。即ち從來の一般的見解に従へば、個人生活と社會生活との差は、單に人間生活の存在の量に於ける大小の差に過ぎず、従つて其處ではその何れに存在の根源性を認むべきかが直接に問題と成り得たのみであつた。蓋し量の大小に於ては、量そのものの性質は直接に問題とならず、先づその大小何れが眞の量であるかが問題となり、その解答に於て量そのものの性質が

間接に決定せられるからである。此處に於て從來の一般的見解は、量の存在の根源性を、小なる存在量たる個人生活に認めるか若しくは大なる存在量たる社會生活に認めるかに従つて、個人實在論と社會實在論とに分裂する。

然るに個人實在論に従へば、人間生活は、その存在の實相に於て量的には獨り個人生活としてのみ實存するのである。而して斯かる見地に立つ時は、社會生活を以て(一)個人生活の單なる集合(原子論的社會概念)と解するか、(二)個人生活間の關係の集合(關係論的社會概念)と解するか、二者その孰れかを選ぶのほかはない。しかし乍ら抑も斯くの如き見解は、人間を直ちに我と解する常識的錯覺の裡にその源を持つのである。我は、既に指摘したやうに人間の存在の實在量である。存在量の實相を實在量にのみ限ることは、宛かも精神なき身體を指して生ける身體と呼ぶに等しいであらう。而して特に、我の身體的實在的側面を以て人間の眞の存在量と錯覺する時、原子論的社會概念は墮胎され、更に我の精神的意味的側面を單純にその身體的實在的側面の派生物と幻覺する時、關係論的社會概念は早産されるのである。蓋し我を數へ得るのはその身體的實在的側面に就てのみであり、我の

關係はその精神的意味的側面に始めて現れ得るからである。しかし我の身體的實在的側面は、單に人間の存在量の全部でないばかりではなく、我そのものの全部を蔽ふものでもない。我そのものにも亦その精神的意味的側面の在ることは、人間がその存在の質に於て身體と共に精神を有する事實に顧みて當然と云はねばならない。従つて我の身體的實在的側面に由つて支持される個人生活の集合と云ふ原子論的社會概念の如きは、全く存在の實相から隔絶した抽象の迷宮ラビリンスであらう。しかし乍ら我の精神的意味的側面は、又決して單純にその身體的實在的側面の派生物ではない。例へば乳呑兒を育てる場合、彼の身體的實在的側面は乳汁を以て育て、彼の精神的意味的側面は言葉を以て育てる。従つて若しも彼に乳汁のみを與へて何等の言葉をも與へなかつたならば、獨り彼の身體的實在的側面のみは發育しても、彼の精神的意味的側面は飢死するに到るであらう。勿論乳呑兒を發生的に觀察すれば、其處には先づ我の身體的實在的側面が現れ、然る後にその精神的意味的側面が現れて來る。しかし乍ら若しも其處にこれらの存在の側面が既に夫々可能態として潜んでゐなかつたならば、決して斯かる發生系列は生じな

かつたであらう。乳呑兒に於ける我の身體的實在的側面は唯だその身體的實在的側面としてのみ成長し得るのであり、我の精神的意味的側面も亦唯だその精神的意味的側面としてのみ發展し得るのである。而して乳呑兒に於てさへ既に彼の我の身體的實在的側面は彼の我々の身體的實在的側面(この場合直接には家族)を實在づけ、その我の精神的實在的側面は彼の我々の精神意味的側面(この場合未だ可能態として父母の裡に潛む)に由つて意味づけられてゐる。換言すれば乳呑兒に於てさへ彼の我なる實在量はその我々なる意味量なくしては實存し得ないのである。従つて我の身體的實在的側面の單なる派生物たるその精神的意味的側面に由つて支持せられる個人生活間の關係の集合と云ふが如きものに社會生活の本質を認める關係論的社會概念も亦全く存在の實相から游離した抽象の浮城でなくてはならない。我の精神的意味的側面は、それ自身獨特の性質を以て我の身體的實在的側面を意味づけると共に、その存在の根據を我々の精神的意味的側面の裡に所有するものであつて、我々の精神的意味的側面が逆に我の精神的意味的側面の裡に、その存在の根據を所有するのでもなければ、又我の精神的意味的

側面がそれ自身の獨特の性質に於て我々の精神的意味的側面を構成するのでもない。斯くの如き存在量の抽象的な單一化は、全く存在量そのものの破壊である。

同様な非難は、又社會實在論に對しても浴びせられなくてはならない。社會實在論に従へば、人間生活の存在の實相は、量的には獨り社會生活としてのみ實存するのである。しかし斯かる見地に立つ時は、夫のコントに於て見るやうに、個人生活は實在的な幻影と化し去るのほかはないであらう。コントにとつては、個人(即ち我)は一個の抽象であつて、唯だ人類(即ち我々)のみが存在したのであつた。然るに我々に固有の存在の側面は、既に指摘したやうに、その精神的意味的側面に在る。従つて人間生活を支持するものが獨り我々のみであるとすれば、人間生活は單に精神的意味的存在たるに止まるであらう。斯くの如き純然たる精神的意味的存在の裡に、固有の存在の側面をその身體的實在的側面に有する我の占むべき位置のないことは固より當然でなくてはならない。しかし乍ら人間生活を純然たる精神的意味的存在と解することは、人間生活の一面に由るその全面の抹殺であらう。人間生活の存在の實相は、それが文化的意味的存在であると同時に現實的實

在的存在であることの裡に在る。意味的な人間生活も、それが實在的存在である限り、其處からその實在的な支柱たる我を取り去ることは不當も亦甚しいと云はなくてはならない。人間生活は實在的には我に由つて支えられ(個人生活)、意味的には我々に由つて支えられて(社會生活)あるのであつて、その孰れの支柱をも取りはずせば、忽ち人間生活の存在の構造は崩壊し去るのである。

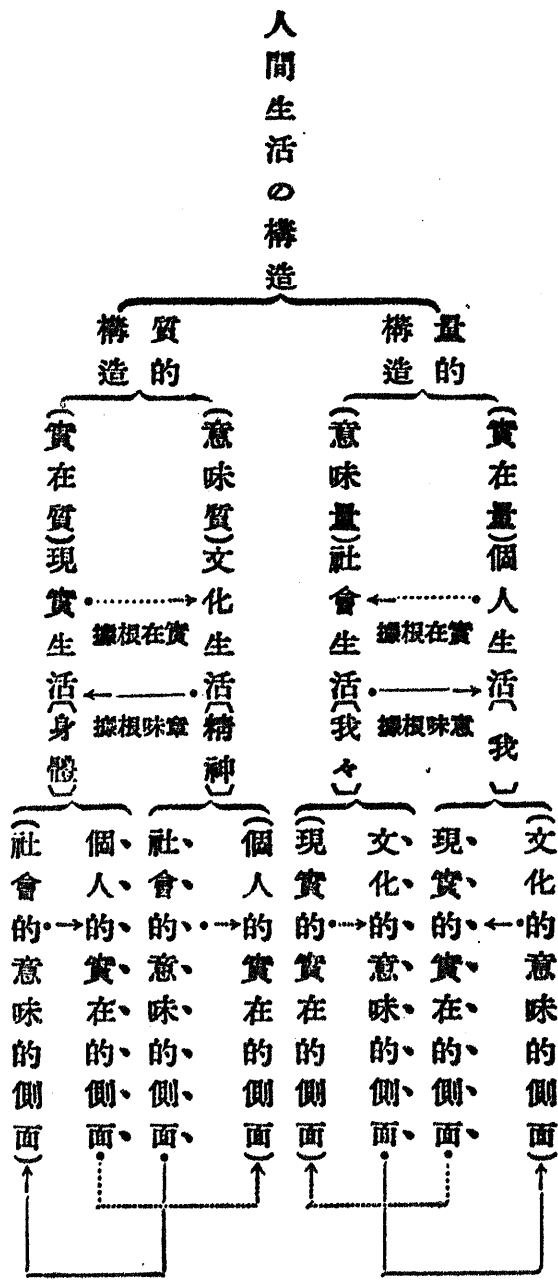
斯くて人間生活の存在の實相は量的には實在量としての個人生活と意味量としての社會生活とを肢體とすることが、此處に強く記憶されなくてはならない。この兩者は、存在の量に於ける様相であつて、斷じて一を以て他を抹消し得る性質のものではない。それらは、獨自の性質を具え乍ら、唯だ統一的に關聯し得るのみである。而してこの兩者の統一的關聯が、兩者の間に横はる實在的竝に意味的の根據の關聯であることは既に述べた。即ち個人生活に固有の存在の側面はその現實的實在的側面に在り、これは社會生活の現實的實在的側面の實在根據であり、同様に社會生活に固有の存在の側面はその文化的意味的側面に在り、これは個人生活の文化的意味的側面の意味根據である。しかし以上の存在の關聯が一應理

解し得たならば、この根據の關聯は一層特殊化されなくてはならない。即ち社會生活の現實的實在的側面は、個人生活の現實的實在的側面に據つて實在づけられると共に、社會生活そのものの文化的意味的側面を實在づけるのであり、同様に個人生活の文化的意味的側面は、社會生活の文化的意味的側面に由つて意味づけられると共に、個人生活そのものの現實的實在的側面を意味づけるのである。従つて個人生活に固有の存在の側面たる現實的實在的側面の意味根據は、直接にはその文化的意味的側面に在り、社會生活に固有の存在の側面たる文化的意味的側面の實在根據は、直接にはその現實的實在的側面に在るのである。個人生活が社會生活の實在根據であり、社會生活が個人生活の意味根據であると云ふ根據の關聯は、以上の迂路を辿つて始めて存在の實相を正確に反映するのである。

而して同様の存在の關聯は、又移して人間生活の存在の質に於ける文化生活(意味質)と現實生活(實在質)なる二様相の上にも認め得るであらう。即ち文化生活が現實生活の意味根據であると云ふ所謂意味根據の關聯に於ては、文化生活に固有の存在の側面たるその社會的意味的側面が、先づ現實生活の社會意味的側面を意

味づけ、然る後にこの現實生活の社會的意味的側面が直接に現實生活に固有の存在の側面たるその個人的實在的側面を意味づけるのである。實在根據の關聯に於ても同様の迂路が辿られるであらう。現實生活の個人的實在的側面が、決して直接に文化生活の社會的意味的側面を實在づけるのではない。それは先づ文化生活の個人的實在的側面を實在づけ、然る後にこの文化生活の個人的實在的側面を通じて間接にその社會的意味的側面を實在づけるのである。

斯くて人間生活の構造關聯を一括して表示すれば次のやうになる――



以上に於て人間生活そのものの極めて一般的な構造が明らかとなつた。しかし其處では人間生活の諸様相も、その諸様相に内在する存在の諸側面も未だ極めて一般的な形式に於て捉られたに過ぎない。次章に於てはこれらの諸様相、諸側面が、社會生活なる一樣相の内實的構造の水準面に展開せられて、具體化されるであらう。蓋しこれらの諸様相、諸側面は既に明らかかなやうに、すべて緊密なる統一的關聯に置かれて居り、従つて如何なる一樣相、一側面の上にも全様相、全側面が何等かの關與の關係に立つからである。

第三章 社會生活の構造

文化現象 人間生活の體驗は、具體的には生活現象に關する體驗である。従つて其處に内在する存在の諸性質も亦、具體的には生活現象に關する人間の體驗の裡に宿ると云はれねばならない。生活現象は、人間生活の現實態である。

さて諸々の生活現象の内、社會生活なる様相の下に入り來たるものが、經濟的現

象、政治的現象、法律的現象、學問的現象、藝術的現象、宗教的現象等一般に文化の諸現象と云はれてゐるものであることは周知の事實であらう。文化現象は社會現象であり、従つて社會現象に非ざる文化現象は存在しない。又社會生活から文化現象を除去すれば、それは少なくとも人間の社會生活ではない。

然るに諸々の文化現象は、人間生活の諸様相の裡、獨り社會生活にのみ入り來たるものではない。それらが同時に、文化生活なる生活様相を充たしてゐることも亦周知の事實であらう。文化現象は、社會現象であると共に、精神現象である。

此處に於て我等は再び人間生活に於ける量と質なる二つの根本規定を見出すのである。即ち文化現象は、量としては社會生活に、質としては文化生活に收容される。換言すれば現象としての文化現象は社會生活に、價值としての文化現象は文化生活に收容されるのである。而してその存在の實相に於て、現象としての文化現象が價值(質)の現象(量)として、價值としての文化現象が現象(量)の價值(質)として現れ來たることは既に量と質との存在關聯に由つて自ら明であらう。故に社會生活なる生活様相に入り來たる文化現象は、先づ質的に經濟的、政治的、法律的、學問

的、藝術的、宗教的等に峻別され、夫々の質に固有な量として現れ來たるのであり、それに反して文化生活なる生活様相に入り來たる文化現象は、先づ社會的に様々な量を執り、その量に固有な質として現れ來たるのである。而して前者即ち文化價值に固有の現象形態は社會生活の文化的意味的側面に顯現し、後者即ち文化現象に固有の價值本質は文化生活の社會的意味的側面に顯現するのである。

然るに文化現象は、現象としても價值としても總てそれらが生活現象である限り、必然的に夫々固有の實在的な地盤の上に立つものでなくてはならない。現象としての文化現象の實在的な地盤は、社會であり、價值としての文化現象の實在的な地盤は、個人精神である。一般に文化現象が一面に於ては社會現象と呼ばれ他面に於ては精神現象と云はれてゐるのは、斯くの如き實在的な地盤に據つて文化現象に興へられた名稱であると解すべきであらう。

これを要約すれば、現象としての文化現象はその意味根據を文化價值の内に、その實在根據を社會の内に有するのであり、價值としての文化現象はその意味根據を社會的(客觀的)妥當性の内に、その實在根據を個人精神の内に有するのである。

社會と個人精神 然るに社會と個人精神とは、右の如く孰れも文化現象の基底であつてみれば、それら自身は明らかに純粹な文化現象ではない。具體的にみても、社會を直ちに經濟的現象、政治的現象、學問的現象、學問的現象、宗教的現象等と全く同一視し、又個人精神を經濟的價值、政治的價值、法律的價值、學問的價值、藝術的價值、宗教的價值等と直ちに同一視することは到底不可能であらう。しかし乍ら同時に社會と個人精神とが何等かの生活現象であること、若しくは生活現象の裡に何等かの位置を占むべきものであることにも亦、固より疑ひを容れる餘地はない。蓋し若しもそれらが何等の現象でもなく、又は現象の内に自らを顯現しないとすれば、到底人間生活の體驗の内にそれ自身の存在の諸特質を顯示することは出来ないからである。此處に於て生活現象は文化現象と現實現象とに峻別され、社會と個人精神とは文化現象と現實現象との文化的中間地帯を形成するものであることが知られねばならない。

然らば此處に先づ現實現象とは何か。生活現象の内、文化現象が意味的現象であるに反して、現實現象は實在的現象である。而して意味的現象が意味の客觀性

をその本質とするに反して、實在的現象は實在の過程性をその本質とする。従つて又前者を客觀的現象、後者を過程的現象とも呼ぶことが出来るであらう。然るに現實現象も亦、固より人間生活に顯現する生活現象として、其處には常に量的と質的との二様相が同時に具はつてゐる。而して現實現象の量的側面は個人生活に吸収され、その質的側面は現實生活に收容されるのである。換言すれば生活の現實現象は、個人の生活現象であると同時に、個體の生命現象である。

然るに既に指摘したやうに、意味的現象なる文化現象は、それが生活現象の一種類である以上、必然的にその實在的な地盤を必要とせねばならなかつた。同様の關聯は、又現實現象に就ても指摘され得るであらう。即ち實在的現象なる現實現象も亦、それが生活現象の一種類である限り、何等かの文化的意味的色彩を帯びることなしに現實に存在することは許されない。換言すればそれは、現實に文化現象との何等の觸接もなくしては存在しないのである。然るに個人の生活現象なり個體の生命現象なりは、決して直接に文化現象に觸接するものではない。蓋し文化現象と現實現象とは生活現象の二様相であり、これらの現象圏は夫々固有の

領域内に存在の實相に於ける兩者の統一的關聯を反映してゐなくてはならないからである。斯くて現實現象は社會又は個人精神を透して文化現象の内に滲透して行くのであり、同様に文化現象は先づ生活觀又は生命觀と成つて、始めて現實現象の裡に滲透し行くのである。従つて社會と個人精神とが文化現象と現實現象との文化的中間地帯であるとすれば、生活觀と生命觀とは現實現象と文化現象との現實的中間地帯であると呼ぶことが出来るであらう。生活觀は個人生活の文化的意味的側面を充たすものであり、生命觀は現實生活の社會的意味的側面を充たすものである。

此處に於て現實現象には、純現實的側面と意味實在的側面とが現れて來る。前者は現實現象に獨自な現象圈であり、後者は生活觀若しくは生命觀に規定せられる現實現象の一側面である。先づ個人の生活現象に就てこれを具體的に指摘すれば、個人の行爲はすべてその純現實的實在的側面に吸収され、個人の態度はすべてその意味實在的側面に收容されるのである。同様に個人の生命現象に於ても亦、その純現實的側面には個人の生命が顯現し、その意味實在的側面には個人の性

格が示現するのである。而して個人の行爲がその生命の量であり、個人の態度がその性格の量であるとするれば、個人の生命はその行爲の質であり、個人の性格はその態度の質である。

而して社會と個人精神とは、實在的には夫々斯くの如き個人の態度に由つて、又は斯くの如き個人の性格に由つて支持されてゐるのである。しかし乍ら此處に警戒を要するのは社會を以て直ちに個人の態度と同一視し、個人精神を以て直ちに個人の性格を速斷する偏見であらう。個人の態度竝に個人の性格は、飽く迄も個人の生活的生命的現象の一側面であり、それらは唯だ夫々の裡に秘む意味的特質の爲に、時に生活的又は生命的現象の純現實的實在的側面即ち個人の行爲なり個人の生命に對して意味的規定を與へ、又同時に文化現象に對して實在的支柱を與へるのである。従つて個人の態度竝に個人の性格は、決して單に社會竝に個人精神の實在的支柱たるに止まるものではない。換言すれば社會竝に個人精神の實在的支柱たるべきものは、單に個人の態度竝にその性格に於ける文化現象に對するそれらの實在的機能に止まるのである。

然るに社會と個人精神とも亦、單に斯くの如き個人の態度又は個人の性格の文化現象に對する實在的機能を以て、それらの唯一の本質的内實となすものではない。即ちそれらは、斯くの如き個人の態度又は個人の性格に由つては單に實在的に支持されるに止まり、其れ自身は自ら進んで文化現象そのものを支持するものとして獨特の意味的實在性を帯びるものであらねばならない。本來個人の態度竝に個人の性格は、それらの文化現象に對する實存的機能に於ても、決して直接に文化現象を支持するものではない。宛かも文化現象が現實現象に滲透し行く場合に現實的なる中間地帯としての生活觀なり生命觀なりを必要としたのと同様に、個人の態度や個人の性格が文化現象を支持する場合にも亦、文化的なる中間地帯としての社會竝に個人精神を必要とするのである。而して社會竝に個人精神は、文化現象の直接の支持者として、即ち文化現象の量竝に質の獨自の基底として、文化的實在性を帯びた獨特の構造を其れ自身に具えてゐなくてはならない。従つて社會竝に個人精神は、個人の態度竝に個人の性格が文化現象を實在的に支持する獨自の文化的構造であるとも云ひ得るであらう。

既に述べたやうに現象としての文化現象は、種々の質的現象形態を執る。この種々の質的現象形態に普遍的な現象形式が社會である。而して個人の態度は斯かる普遍的な現象形式を通じて、始めて現象としての文化現象を實在的に支持するのである。故に一言にして蔽へば社會とは、個人の態度に由つて實在的に支持せられる文化現象の普遍的な現象形式にはかならない。これに反して價值としての文化現象は社會的に種々な存在形態を執る。この價值の種々の存在形態の意味的存在形式が價值本質であり、その實在的存在形式が個人精神である。而して個人の性格は斯くの如き價值の實在的存在形式を通じて、始めてその意味的存在形式なる價值本質に迫つて、これを實在的に支持するのである。故にこれ又一言にして蔽へば個人精神とは、個人の性格に由つて實在的に支持せられる文化價值の實在的な存在形式にはかならないのである。

以上に於て社會生活の背景を成す人間生活一般の内實的構造の概容を覗ひ終へた――



社會生活の内實的構造とその認識

社會生活に固有の存在の側面がその文化的意味的側面に在り、其處には文化現象が、現象として、經濟的、政治的、法律的、學問的、藝術的、宗教的等種々の現象形態を執つて現れて來ることは既に述べた。

その一 「文化現象」と「社會現象」

然るにこの種々の文化現象の質的現象形態の本質を決定するものは、一面に於ては質としての文化價值であり、他面に於ては量としての社會である。而かもこ

の兩者は、それらの本質上、常に同時にその現象形態の本質決定の契機として作用し、従つてその本質決定に際しては斷じてその孰れの一つをも缺くことは許されない。しかし乍ら斯くの如き本質決定に際して、この兩契機はその作用過程に於て自ら直接と間接との作用次序を生ずる。文化價值なる意味的決定契機が直接にその現象形態の本質を決定する文化現象を、筆者は特に「文化現象」と呼び、社會なる實在的決定契機が直接にその現象形態の本質を決定する文化現象を、特に「社會現象」と呼びたい。前者に層するものは學問的現象、藝術的現象、宗教的現象であり、後者に屬するものは經濟的現象、政治的現象、法律的現象等である。

然るに文化現象の現象形態にとつて、その本質決定の固有の契機は、社會であつて、文化價值ではない。蓋しかの價值としての文化現象に固有の性質がその意味妥當性に在るのに反して、現象としての文化現象に固有の性質は飽く迄もその現象性即ちその現實性に在らねばならないからである。一般に文化現象は、現象としても價值としても、その本質決定の契機として一面に於ては文化價值を、他面に於ては社會を有する。而して現象としての文化現象に固有の本質決定の契機は

社會に在り、價值としての文化現象に固有の夫れは文化價值に在るのである。

斯くて筆者の所謂「文化現象」に就ては、假令それがその現象形態の本質決定に際して文化價值の決定作用を直接に受けるものではあらうとも、其れに固有の本質決定の契機は社會に在ることが指摘されねばならない。而かも「文化現象」は、斯くの如く其れに固有の決定契機なる社會に由つて間接にその本質を決定されるが故に、「社會現象」としては正に「副次的な社會現象」とも云はるべきであらう。然るに「文化現象」が文化價值そのものの社會的現象形態であるのに反して、「社會現象」は社會的に本質を決定された道德的價值の現象形態である。従つて「社會現象」が、其れに固有の決定契機なる社會に由つて同時に直接にその本質を決定される「第一的な社會現象」であることは云ふ迄もない。

此處に於て現象としての文化現象は、所謂「文化現象」と「社會現象」とに峻別され、従つて其れに關する認識も亦二種類に區別されて來る。即ち種々の「文化現象」に於ける夫々の文化價值の現象形態に對する社會的決定性の認識と種々の「社會現象」の現象形態そのものの構造の認識とが、現象としての文化現象に關する認識の二

種類を形成するのである。前者に関する科學は認識(若しくは知識)社會學、藝術社會學、宗教社會學等一般に文化社會學と呼ばれてゐる社會學の特殊研究部門であり、後者に関する科學は經濟學、政治學、法律學等一般に理論的社會科學と云はれてゐる研究部門である。

その二 社會

然らば現象としての文化現象に固有の、その本質決定の契機たる社會とは、如何なる性質を具えたものであるか。

既に指摘したところに従へば社會は、個人の態度に由つて實在的に支持せられる文化現象の普遍的な現象形式である。然るにすべて現象の普遍的な現象形式が時間と空間とに在るとすれば、社會は先づ文化現象を可能ならしめる時間であり、空間であると云へやう。固より斯くの如き文化的時空が、夫の自然現象の普遍的現象形式たる自然的時空と同一のものでないことは論を俟たない。自然的時空が人間の感覺に由つて支持されてゐるのに反して、文化的時空は個人の態度に由つて支持せられてゐるものである。従つて自然的時空が感覺的時空であると

すれば、文化的時空は超感覺的時空である。蓋し個人の態度は單純な感覺を超えた意味的文化的な生活觀の具體的實在的な表現にほかならないからである。而して又自然的時空が人間の感覺の恆常性に據つて不變の特性を帯びてゐるのに反して、文化的時空は個人の態度の流動性に據つて變化の特性を帯びてゐる。即ち自然的時空が不變的非歴史的時空であるとするれば、文化的時空は可變的歴史的時空である。従つて自然的時空が物體の世界の基底であるとするれば、文化的時空は人間の世界の基底である。如何なる文化現象も、斯くの如き文化的時空の基底なくしては顯現することが出来ない。

然るに一般に時間と空間とは、現象の普遍的な現象形式として、夫々獨特の性質を見え乍らも、兩者相待つて始めて現象の基底を成すのであり、決して各自單獨に現象の基底たり得るものではない。換言すれば獨り時間にのみ、若しくは獨り空間にのみその基底を有する現象は、決して本來の具體的現象ではなくして、思惟的な抽象的現象として寧ろ何等の現象でもないと云はねばならない。文化的時空に於ても、この本質關聯は、固より何等の例外をも許すものではない。文化的時間

竝に空間は、夫々獨特の性量を具え乍らも、決して單獨に存在し單獨に作用するものではない。文化的時間^は文化的空間の時間として、文化的空間^は文化的時間的空間として、始めて文化現象の基底たり得るのである。然るに一般に文化的時間^は歴史と呼ばれ、文化的空間^は社會と呼ばれてゐる。この用語例に従へば、歴史は社會的歴史として、社會は歴史の社會として、始めて文化現象の基底たり得るとも云はれ得るであらう。^(註)

註。しかし此處に所謂文化的時間を單純に歴史と呼ぶことは、決して正確な用語例ではない。蓋し現象としての文化現象は、「文化現象」と「社會現象」とを問はず、すべて其れ自身の歴史を有して居り、これと文化的時間とは全く別種のものであるからである。即ち文化現象そのものの歴史は、決して直ちに文化的時間ではない。前者は謂はば文化的時空の生産物の歴史であつて、その生産物の基底に横たはる歴史ではない。文化的時間は、文化現象の上を流れる歴史ではなくして、その下に横たはる歴史である。文化現象そのものの歴史は、一般に文化史又は社會史と云はれてゐる歴史的社會科學の研究對象であり、文化的時間は社會學の認識對象である。

却説既に述べたやうに文化現象が社會生活の文化的意味的側面であるのに反して、文化的時空はその現實的實在的側面であり、謂はゞ前者が社會生活の果實で

あるのに反して、後者は社會生活の土壤である。更に審らかに云へば社會生活は生活體としての人間に於ける我々の生活であり、文化現象がこの我々の純粹な若しくは固有な意味的生活側面であるのに反して、文化的時空は我に由つて支持せられる我々の實在的生活側面である。(我と我々との性質に就ては第一章を參照されたい。)此處に於て注意を要することは、我と我との關係が直ちに我に由つて支持せられる我々の生活ではないことである。我と我との關係は、純然たる個人、の行爲の世界に現はれる、現實現象である。然るに我に由つて支持せられる我々の生活は、決して單なる現實現象ではなく、従つて單なる個人の行爲の世界ではない。其れは本質上文化現象の實在的地盤であり、文化現象と現實現象との文化的中間地帯である。即ち我々の生活は、決して我と我との關係ではなくして、我々、そのものの關係であり、我を現實人、我々を文化人と呼ぶなれば、現實人の關係ではなくして、文化人の關係である。我々の生活が我に由つて支持されねばならないのは、その現象性の爲であつて、その本質性の爲ではない。寧しろ我と我との關係は、我々、そのものの關係に由つてその本質を規定されるのであり、従つて其れは我々

そのものの關係の現象形態にはかならない。我々の關係は、斯くの如く我と我との關係を規定するものとして、其れ自身は何等の現實現象ではなくして、現實的文化現象であり、正確に云へば文化現象の普遍的現象形式としての文化的時空である。

斯くて文化的時空は、我々の實在的生活形式であると云へやう。即ち文化現象が我々に固有の意味的生活現象であるとすれば、文化的時空は我々の意味的生活現象の基底に流れる我々の實在的生活形式である。而して文化的時間、我々の實在的生活形式に於ける動的構造であり、文化的空間はその靜的構造である。換言すれば社會の動的構造が文化的時間であり、社會の靜的構造が文化的空間である。而して社會の動的構造が社會の靜的構造の階段(Stufe)として、又社會の靜的構造が社會の動的構造の層(Schicht)として、始めて文化現象の眞の實在的基底たり得ることは既に指摘したところに由つて自ら明らかであらう。

その三 社會の認識

然らば以上の如き性質を有する文化的時空としての社會の認識は、如何にして

可能となるであらうか。此處に社會學方法論の根本問題が始めて眞正の姿に於て現れて來る。

前述のやうに社會が我々の實在的生活形式であるとするれば、其れは我々に固有の意味的生活現象の裡に其れ自身に固有の實在的な規定力として現れて居なくてはならない。而して我々に固有の意味的生活現象の内、社會の實在的な規定力を最も直接に顯在せしめてゐるものは、經濟的現象、政治的現象、法律的現象等所謂「社會現象」である。既に述べたところに従へば「社會現象」は、社會的に本質を決定された道德的價値の現象形態であり、この現象形態そのものの構造の認識は、經濟學、政治學、法律學等所謂理論的社會科學の認識に歸屬せしめられたのであつた。然るにこの道德的價値の現象形態に於ける實在的な規定力こそは、社會學の本來の對象である。換言すれば斯くの如き實在的規定力の組織構造こそ、眞の社會の姿であり、從來の諸學者が斯かる「社會現象」の裡に潛む社會の姿に背を向けて、社會を或は生物的現象の裡に、或は心理的現象の裡に探り求めたのは、全く社會研究の邪道に陥つたものと云はざるを得ない。社會學者が常に注目すべきは、「社會現象」で

あつて、生物現象若しくは心理現象であつてはならない。「社會現象」は、固より質的現象として、經濟的、政治的、法律的等種々の質的現象形態を執り、従つてその構造は夫々の現象形態に於て他との混淆を許さぬものであることは云ふ迄もない。しかし乍ら其れ等種々の現象形態に顯在する實在的な規定力は、現象形態の質的區分に従つて本質上の變異を示すものではない。其れは、「社會現象」の全現象形態に普遍的な規定力であり、従つて全道德的價值顯現の本來の實在的な地盤である。而して斯くの如き實在的規定力に固有の現象性は、其れが個人の態度に由つて支持せられる時に、始めて實現されるのである。従つて社會の認識に於ては、本來の「社會現象」に於ける普遍的な實在的規定力の組織構造の認識と共に、其れを支持する個人の態度の認識が必須のものとなるのである。斯くして社會の認識は、初めて文化現象と現實現象との文化的中間地帯を普ねく照し出すに到るであらう。然るに「社會現象」は、現象として、常に現在に顯現する。従つて我等の認識の對象に直接浮び出でる「社會現象」も亦、常に現在の「社會現象」であらねばならない。然るに現在の「社會現象」は、本質上過去の「社會現象」と未來の「社會現象」との橋梁である。

過去竝に未來の「社會現象」に關する我等の認識は、この本質關聯に於て始めて可能となる。即ち我等は、現在の「社會現象」の裡に潛在する限りに於て、過去の「社會現象」を理解し、本來の「社會現象」を豫見するのである。この「社會現象」の現在性、また殊にこの「社會現象」に關する認識の現在性は、理論的社會科學特に政治學の歴史が最も雄辯にこれを我等に物語るものであらう。今試みにプラトーンの國家論とヘエゲルの國家論とを比較してみよ。更にヘエゲルの國家論とマルクスの國家論とを比較してみよ。其處に現はれる認識の差異は、決して認識の發展段階に於ける上下の差違ではなくして、全くその窮極の根據を「社會現象」の現在性の裡に有する社會現象に關する認識の現在性の差違に歸せらるべきものである。

斯くて「社會現象」の實在的規定力たる社會も亦、常に現在の「社會現象」の裡に潛んで、我等の認識の對象となるのである。換言すれば社會學の本來の對象は、常に現代の社會であらねばならない。然るに現代の社會は、決して單純に現代の社會として存在し、消滅すべきものではない。其れは、其れ自身の存在を保ち乍らも、過去の社會の結果であると共に、本來の社會の前提である。換言すれば現代の社會は、

現代の文化的空間であると共に、過現未三相を通じて流れる文化的時間の現在なる一段階である。此處に於て社會學の對象領域は、本質上二種類に分裂する。即ち一は現代の文化的空間としての社會であり、他は現代の文化的時間としての社會である。前者は現代の社會の靜的構造即ち存在構造であり、後者は現代の社會の動的構造即ち作用構造である。而して前者を對象とする研究部門は社會構造論であり、後者を對象とする研究部門は社會變動論であつて、社會學はこの二つの研究部門に由つて初めてその對象領域を完全に尋究し得るのである。

既に述べたところに従へば社會は、現在の「社會現象」に普遍的な實在的規定力として、直接に認識せられる。約言すれば其れは、先づ現在の作用として認識せられるのである。この現在の作用の現代に於ける獨自な存在關聯が、現代の社會の靜的構造を成すものであらう。然るにこの現在の作用は、本質上そのすべてが現代に特有のものではない。蓋し「社會現象」の實在的規定力は、その本質に於て「社會現象」と共に古く、又その現象に於て「社會現象」と共に新しいからである。従つてそれらの作用の多くは、過去に特有な作用本質の現在的な顯現と見られなくてはなら

ない。故に社會構造論は、先づ現在の「社會現象」に就て認識せられる實在的規定作用の裡に、幾多の歴史的な作用類型(例へば *Gemeinschaft* や *Gesellschaft* の如き)を峻別し、然る後に其れ等の作用類型の現代に於ける獨自な存在關聯を探求しなくてはならない。然るに種々の作用類型は、夫々に文化現象に對する獨自な作用構造を所有する。而して更にこの作用類型の獨自な存在關聯たる現代の社會の靜的構造も亦、其れ自身文化現象に對して獨特の作用構造を獲得する。この現代の社會に固有な作用構造は、過去の種々の作用構造の段階として確立されて未來の作用構造の前階を成すものでなくてはならない。社會變動論は、現代の社會に於ける種々の歴史的な作用類型の存在關聯に由つて、過去の社會の作用構造を階段的に秩序づけ、斯くて未來の社會の作用構造への道を拓らくものである。